

NPO okayama

Social
Active
Learning
Center
Okayama

SALCO



ノートルダム清心女子大学の大学生と岡山市立岡山後楽館高等学校生徒による交流会

SALCO(ソーシャルアクティブラーニングセンター おかやま)」として取り組んでいる若者の社会参画推進。NPONGOインターンシップのコーディネートやアクティブラーニングプログラムの実施支援、学生有志によるプロジェクトの伴走支援など、岡山県内の大学やNPOの協力のもとで形づくり、その取組は少しずつ広がってきています。

今号では、SALCOを実際に活用した事例を紹介しながら、地域で学生が学ぶことの価値と意味について考えます。

Contents

対談 「地域社会での学びに期待すること」	2
岩満賢次(岡山県立大学) × 西村こころ(岡山NPOセンター)	
県内の大学による、NPONGOインターンシップの取組	4
- SALCOのインターンシップを活用した2大学の紹介 -	
寄稿 短期間でもNPO団体が学生のインターンシップを受け入れることに価値はあるのか ...	5
森分志学(NPO法人だっぴ)	
社会福祉士を育む現場から - ノートルダム清心女子大学の取組 -	6
NPOと大学が協働で「授業」をつくる	7
SALCO窓口から	8



●対談

地域社会での学びに期待すること

岩満 賢次（岡山県立大学 保健福祉学部 教授）

西村 こころ（岡山NPOセンター 企画推進センター 所長）

年間通してSALCOを活用してくださった県立大学の岩満先生とSALCOの運営を担う西村が、この一年をふりかえりながら「地域で学ぶこと」の意味について考えました。

■「体験」からその先へ 2021年度の取組をふりかえって

西村：2021年度は、SALCOを通じて、県立大学さんと多くの事業を一緒にできました。今日はこの一年の取組をふりかえりながら、大学生が、NPO・NGO、地域で活動することの意味や価値についてお話できればと思います。どうぞ、よろしくお願ひいたします。

この一年、県立大学さんとの取組を大きくふりかえると、今年度から開始した「SALCOのインターンシップ」の実施、サービスラーニング室の「学生ボランティアスタッフ養成講座」の開催、「三大学合同発表会」への参加の三点が挙げられるかと思ひます。まずはそれぞれについて、実施の背景や取組まれている感想などをうかがってみたいと思ひます。

－ SALCOのインターンシップ

岩満：県大は、何らかの形でボランティアにかかわる学生は、比較的多いんです。在校生は1学年400名程度×4学年で、全校で1,600名ほどなのですが、学内の2020年度調査によると、ボランティア経験のある学生は約4割で、36%は未経験だがボランティアしたいという結果が出ており、関心のない学生は少ないです。

西村：半数近くが経験者であることに加え、「活動潜在層」も厚いんですね。その中で今回SALCOのインターンシップを活用しようと思われたのは、どういった理由からでしょうか。

岩満：・県大には正課として「地域創生演習」という、1年生を対象とした授業があります。地域に出てボランティアをする内容も盛り込まれた授業なのですが、「授業」として実施するので、日数などの制約ができてしまうところが難点でした。その授業を履修した学生の中には、授業内での活動だけでは物足りず、消化不良になる学生が毎年少しずついたんです。そういった制約をできるだけなくし、純粋に関心のある団体に参加できる機会をつくれたらと思っていました。

西村：今回のインターンは、授業を履修した学生を対象としたプログラムだったのですか？

岩満：そこまで厳密なものではなく、広く参加を呼びかけるものでしたが、結果的に、その授業を履修した学生が、今回のインターンに参加したという例が多かったです。

西村：そうだったんですね。実施されてみていかがでしたか？
岩満：コロナ禍で、なかなか学生に直接会えない時期でもありましたが、参加した学生はみんな積極的に取り組んでくれました。インターンシップ期間中はもちろんですが、その後も何らかの活動をしている子が多いです。県大の中で、地域での活動について発表する場があるのですが、そこで発表をした2年生もいました。

<2021年度のインターンシップ先>

- ・ NPO法人きよね夢てらす（総社市）
- ・ NPO法人倉敷町家トラスト（倉敷市）
- ・ NPO法人オカヤマビューティサミット（岡山市中区）
- ・ ぬかつくとこ（株式会社ぬか）（早島町）



西村：その後の動きに繋がっているのは良いですね。

岩満：そうですね。ビューティサミットさんに行った学生は、今も活動を続けています。子ども食堂をやりたいという気持ちを持って参加していた学生も、引き続き事例を集めて見に行ったりしています。きよね夢てらすさんに参加した2名は、関心のあった災害支援について理解を深めたようです。真備で被災した当時は高校生で、その際の経験とインターンシップでの学びを重ねて、高校生世代へのケアが穴だったと感じているようで、授業とはかかわらないところで自主的に調査しようかなど話をしていました。ぬかさんで活動した学生は、福祉系の活動へのかかわりを増やしています。町家トラストさんに行った学生は、団体さんで使ってもらえるHP作成を引き続き頑張っています。この学生は、学生の特長と団体のニーズがうまく合致しました。まちづくりに関心がある学生だということは知っていたのですが、そんな特技があることは、インターンを通じて初めて知ったことです。

西村：岩満先生が丁寧に学生さんのニーズを把握しておられたからこそその成果とも感じていましたが、インターンシップを通じて新たに見えた一面もあったのですね。

西村：活動した学生さんたち、それぞれ次の行動に繋がっているわけですが、気持ちの変化があったのでしょうか。

岩満：「やりたいこと」が具体的に出てくるきっかけにはなったと感じています。

西村：なるほど。学生時代って、漠然とした「やりたいこと」はあっても、具体的なイメージは描きづらいという人も多いかもしれません。なんとなく感じている関心をきっかけに、一歩地域に出て色々な人に出会い話したり共に活動したりする中で、自分に向いていることが見えたり、逆に向いていないことに気付いたりするのかもしれないですね。

岩満：例えば今の就活って、「条件探し」になりがちですよね。そうじゃなくて「自分は何がやりたいか」について、仕事になるかは別としても、考える機会は人生を描いていく上で、とても重要だと思っています。

－ 学生ボランティアスタッフ養成講座

西村：今、県大では、ボランティアに参加しやすい環境づくりのひとつとして「サービスラーニング室」の取組充実も図られていると思ひます。その一環で、サービスラーニング室で活動する学生ボランティアスタッフの仕組みを取り入れ、今年度はその養成講座に講師で呼んでいただきました。その際に参加した学生さんたちは、その後どうされていますか？

岩満：12月に講座を実施してから、月1回ずつくらいで集まっています。今は2022年春に入学する1年生に向けたボランティア紹介や参加の促し方について色々考えているようです。講座の学びもフルに生かしながら、チラシ作りに留まらず、動画も制作しようとしています。チラシは、それぞれが受講している授業などで宣伝に行こうということも話していました。

学内に登録している「サークル」なんかは、新入生に紹介するタイミングがあるのですが、ボランティア活動の場合、サークルにもなっていない任意の形も多いんです。そうすると、新入生に紹介できる機会がそんなになかったりするんですよね。今回学生スタッフが、自分たちの取組も含めて様々なボランティア活動を紹介できる機会をつくろうとしています。

西村：学生だからこそできる「紹介の方法」もありそうですね。まさに活動に参加しやすい環境づくりに繋がっていると思います。

岩満：これまで様々な角度からボランティア講座をしてきましたが、一番具体的な実践に繋がっていると思います。多様な学部の学生がスタッフになるとそれぞれの強みが生かせると思うので、他学部へのアプローチについては、教員間でもっと協議していかなくてはと思っています。

－ 三大学合同発表会

西村：こちらは岡大発の取組でした。岡大、ノートルダム清心女子大、県大の3大学で、インターンシップや授業などを通じて地域で活動した取り組みについて発表する場でした。

岩満：県大は孤立していて他大学との交流の機会があまりないので、他大学の学生と交われたのが良かったです。

西村：他大学でも「交流の機会がない」という話は割とよく耳にしますし、ほかの2大学からも交流による成果やポジティブな感想も聞かれました。

岩満：正課・課外問わず、大学を超えて地域活動をテーマに和気あいあいと話せる場だったのではと思っています。

■SALCOを活用してよかったこと

岩満：学生にとっては、何より安心して活動できる場が確保されたこと。学生側からすると、大学が提供する情報は安心感に繋がっています。ネットで情報を探しても、ボランティア関連情報は、HPに十分掲載されていないことも多く、そうすると飛び込むのが不安になる。特に県外から来ている学生は活動も地域のこともわからないし、その中でひとつひとつ探すのは難しいんですよね。

また、教員にとっては、SALCOが団体と大学の間に入り、調整してくれたことが助かりました。学生がNPOの情報をつかみづらいのと同様に、教員もボランティア活動先やNPOインターンシップの受入先を探すのは大変です。問い合わせひとつとっても、平日の日中にスタッフが常駐しているのか、そもそも事務所がある団体なのか、仮に繋がったとして誰に相談するのが適当なのかなど判断が難しい。NPOの担い手は多様ですし、伝え方を失敗しないようにと思うと、迷いも生まれます。大学の先生はNPOのことを全然知らない人も多いし、勘違いも多いのが現状。SALCOが間に入っていることで、窓口が一本化すると共に、団体のキーパーソンや書類だけではわからない、より具体的なことが分かるので、その分の手間がかからず、安心して繋ぐことができるので、とても助かりました。



■地域社会で学ぶということ

西村：いわゆる一般的な企業インターンシップではなく、SALCOのNPOインターンシップであることの効果や意味はどこにあると思われますか？

岩満：ただ就職を目指すだけじゃないところ、課題解決に取り組む団体の活動を周りの人に知ってもらえることに繋がる点だと思います。今回も、実際に取組に触れた学生が、生の声を周りに届けていました。そのことがいろんな人に知ってもらうきっかけになるので、大きな効果だと感じています。

西村：インターンに参加した学生だけでなく、その課題について広く知る人が増え、かかわる人を増やすことにも繋がります。体験した学生自身にとってはどうですか。

岩満：自身がやりたいことを見つけたり、続けたいことを見つけられた機会だったと感じています。授業だけとなると、やはり反応は異なります。授業でインターンに参加した学生は、数年後、内容すら覚えていないということも多いです。それくらい「記憶にすら残らない」。就職目当てだと、よく見られようとして過ごしてしまうという心理もあるかもしれません。今回のNPOでのインターンシップは、体験後も何らかの活動や行動に繋がりと、記憶に残る体験となっているのではと思います。

西村：活動先で出会う団体スタッフや代表の考え方や価値観に触れることは、目の前の学びだけでなく、その先の生き方を考えるきっかけにもなりそうです。

岩満：こういう取り組みは、振り返りまでしっかりあることで効果に繋がった部分も大きいのではと思います。今回、学生と受入団体、ファシリテーターとしてだっぴさんに協力をいただき、大学教員、SALCOスタッフというメンバーで振り返りを実施しましたが、そこで学生も団体さんもそれぞれに理解をもう一步先に進めることができたと感じています。そこにどういう意味があったかを考える時間を持てました。

西村：学生には「記憶に残る体験」が蓄積され、団体には取組の周知を進める機会にもなることは、SALCOにおけるNPOインターンシップの価値ともいえるのかもしれませんが。

岩満：今年度はコロナの影響でオンラインによるふりかえりでしたが、来年度は対面でできると良いですね。

西村：はい。ぜひ実施できるよう工夫してみたいと思います。今日は、ありがとうございました。

SALCOで、こんなことができます。

1. 大学(先生)との連携・協働による、社会問題・まちづくりに関するプログラムの開発と提供
 - ・ NPO/NGOインターンシップのコーディネート
 - ・ サービスラーニングプログラムの開発と提供
 - ・ ボランティア体験プログラムの開発と提供
 - ・ 正課(授業)の実施支援
2. SALCOの相談窓口における相談対応や支援
 - ・ 学生さんの、インターンシップや活動に関する相談対応
 - ・ 学生有志によるイベントやプロジェクトの伴走支援
 - ・ 教員のみなさんの、インターンシップや授業に関する相談対応
 - ・ 団体や地元企業のみなさんからのインターンシップに関する相談対応
3. LINEなどのSNSによる学生に身近な情報提供
 - ボランティアやNPONGOインターンシップに関する情報を、学生にとって無理のないコミュニケーション手段で、お届けしています。

上記に当てはまらないものでも、気軽にご相談ください。

● 県内の大学による、NPONGOインターンシップの取組 － SALCOのインターンシップを活用した2大学の紹介 －

2021年度より開始したSALCOのインターンシップ、本年度は2大学と協働実施しました。取組を紹介し、学生たちにどのような学びがあったのか、そして団体にとってどのような意味があったのかについて、考えてみました。

■ 実施概要

岡山県立大学と新見公立大学の2大学と協働する形で、SALCOのインターンシップを展開しました。県大では、課外取組として6名が参加し、新見公立大では正課の取組として7名が参加しました。

両大学ともプログラム開始前に、インターンシップの導入意図や活動先や活動エリア、進め方などについて事前打ち合わせをおこなった上で開始しました。役割分担については、主に大学が学生のニーズ把握や関連手続きに対応し、SALCOが団体のニーズ把握や関連手続きを担っています。それ以外のインターンシップ全体のプログラム構築や評価方法(学生・団体)の検討は、評価検討会を通じて意見交換をしながら進めています。大卒はこのような整理をしていますが、細かな分担や進め方は、適宜話をしながら、効率的かつ効果的に実施できるようカスタマイズしています。

■ 評価検討会の実施

インターンシップの成果の可視化を目的とし、担当の先生、SALCO職員、アドバイザーとして「NPO法人だっぴ」代表理事の森分さんにご参加いただく形で、月に一回程度(一大学あたり合計6回程度)、評価検討会を開催しました。今回は学生と受入団体双方にアンケートをとり、その

成果を測り、インターンシッププログラム全体の評価をおこなっています。学生と団体それぞれに、どのような成果があったかは、5頁の森分さんの記事をご参照ください。

■ インターンシップの「出口」支援

参加～振り返り～その先の行動へ

インターンシップ終了後は、その体験が「自分自身」や「社会」にとって、どういう意味を持つものだったのか理解を深めるために、また団体にとっては、学生に伝えられる体験を提供できていたかを確認するために、学生と受入団体合同での振り返り会を実施しています。評価検討会で企画を進め、当日は検討会と同様、NPO法人だっぴ協力のもとで、開催しています。

通常、振り返り会まで到達すると、参加した学生は、一定の満足感や達成感を得て、そこで活動を完結させてしまいがちです。SALCOのインターンシップでは、体験を一過性のものに終わらせず、次の行動に繋げることを大切にしています。今回もインターンシップ終了後、継続してボランティアに参加する学生や、新たな課題意識をもとに次の活動を始めている学生もいます。SALCOでは、そういった具体的な行動への意欲を引き出せるよう意識し、「次はこれに取り組みたい」が見つかった時に、機会や場に繋げるよう体制を整えています。

	岡山県立大学	新見公立大学
位置づけ	課外プログラムとして実施	正課として実施 「地方行政インターンシップ」
対象	県立大学学生	上記授業履修者 (主に、社会福祉士実習を経た3年生)
期間	約 10日間	約 5 日間
受入先	・ NPO法人オカヤマビューティサミット(岡山市) ・ NPO法人きよね夢てらす(総社市) ・ NPO法人倉敷町家トラスト(倉敷市) ・ むかつくところ(株式会社めか) (早島町)	・ NPO法人岡山市子どもセンター(岡山市) ・ NPO法人ENNOVA OKAYAMA(岡山市) ・ NPO法人あかね(岡山市) ・ NPO法人オリーブの家(津山市) ・ むかつくところ(株式会社めか) (早島町) ・ 一般社団法人SGSG(岡山市)
実施のプロセス	STEP1 教員とSALCO職員によるプログラムの事前打ち合わせ STEP2 受入団体調整 STEP3 説明会・参加者募集・マッチング STEP4 インターンシップ実施 STEP5 学生・団体合同のふりかえり会 STEP6 教員とSALCO職員による取組の評価	STEP1 教員とSALCO職員によるプログラムの事前打ち合わせ STEP2 事前学習・県内の団体紹介 STEP3 受入団体調整とマッチング STEP4 インターンシップ実施 STEP5 学生・団体合同のふりかえり会 STEP6 教員とSALCO職員による取組の評価
ポイント	・ 大学教員による学生のニーズ把握と、ニーズに基じた活動へのマッチング ・ 団体ごとの体験活動の工夫 ・ 若者のキャリア支援にたずさわるNPOと連携した「評価検討会」と「ふりかえり会」の実施	・ 行政インターンシップに参加する学生とNPOインターンシップに参加する学生による授業展開 ・ インターンシップ後、さらに理解と実践力を身に付けられる授業(NPO事業論)を用意 ・ 若者のキャリア支援にたずさわるNPOと連携した「評価検討会」と「ふりかえり会」の実施

寄稿「短期間でもNPO団体が学生のインターンシップを受け入れることに価値はあるのか」

森分志学（NPO法人だっぴ代表理事）

■ はじめに

SALCOでは、夏休み期間を使って、学生が岡山県内のNPO団体にインターンシップとして参画し、活動をともにするプログラムを行いました。その結果から「団体が学生を受け入れることの価値」について考えていきたいと思います。

今回のインターンシップは、岡山県立大学は10日間、新見公立大学は5日間の実習期間を確保して行われました。活動内容の多くは、学生たちが団体の既存事業に関わるかたちです。インターンシップ実施後に行った受け入れ団体を対象とするアンケートによると、インターン生を受け入れて良かったと感じたことの1つとして、半数以上の団体が「事業の担い手として学生の存在が助かった」と回答しています。また、インターン生を受け入れる理由としては、「学生の成長にとって必要不可欠な経験だと考えているため」「地域課題に対する理解促進と周知のため」の2項目が上位回答となっています。

本稿では、団体が学生を受け入れることの価値として、①学生の成長②既存事業の促進③活動の普及啓発の3つの要素を取り上げます。

■ 学生の何が変容したのか(①学生の成長)

今回のインターンシップにおいては、「まずはNPO活動に実際に関わってみる」ことが核になっていたと考えます。その関わりから学生たちに辿り着いてほしい目標を設定し、以下A～Eの項目で参加後アンケートを行いました。

アンケート項目

[A]地域社会には、様々な問題が潜んでいることについて視野を広げることができましたか？

[B]ボランティア活動、NPO活動に対する知識を得たり、その意義について理解を深めたりすることができましたか？

[C]課題解決に向けて、様々な人とコミュニケーションを取りながら共に活動することができましたか？

[D]地域社会の身近な問題に対し、課題解決法を自ら考えたり、支援したりしようという意識は生まれましたか？

[E]社会の一員として社会活動に参画する必要性を認識できましたか？

A～Eのどの項目においても、6割の学生が「できた/生まれた」と回答しています。(回答は5段階で「できた/生まれた」が最高評価)

このことから、学生の成長として以下4点の変容があったと考えられます。

- ①地域社会の課題を認知/理解する【知識理解】
- ②NPO活動を認知/理解する【知識理解】
- ③課題を解決するにあたって必要な解決への意欲と協働性を備える【能力・意欲の向上】
- ④社会参画の必要性を認識する【能力・意欲の向上】

知識理解のプロセスとしては、「相談に来られる方やオンラインでの相談について聞かせてもらった」

「地域福祉と地域の取り組む防災活動についてのお話を聞かせていただき、地域の課題や地域の抱える問題、また地域が克服してきたことなど学べることができた」などの記述から、課題を抱える当事者や課題解決に取り組む人とのやりとりによって学び取った過程が想像されます。

インターンシップ後の振り返りの機会では、学生が現場で対峙した「社会課題」を題材に、学生と団体の方とが対話しました。学生が目にした光景は、団体の人たちのフィルターではどう映っているのかを理解することを通して、多角的に事実を捉える力を養いました。このワークを可能とするのは、実際に体験していることが重要で、「NPO活動に実際に関わってみること」から始まる理解であると思います。

■ 受け入れ団体に与えた影響(②既存事業の促進③活動の普及啓発)

学生を受け入れたことが団体にどのような影響を与えたのかについて、受け入れ団体へのアンケートを見ると、「インターン生の興味・能力を活かすことを今回は考えた結果、予定していたができていなかったアーカイブの作成をお願いしたことが良い結果につながった。」

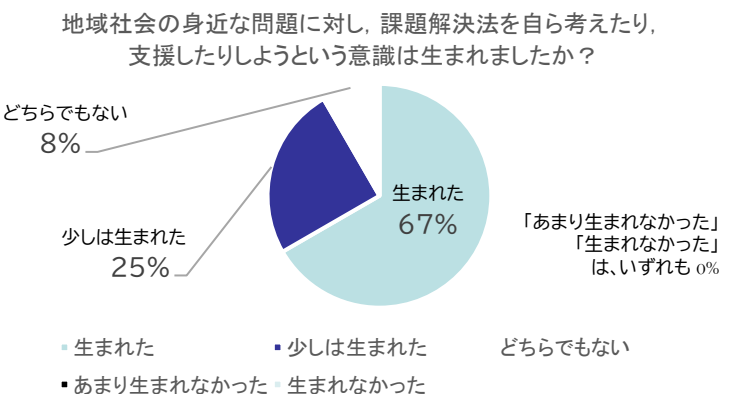
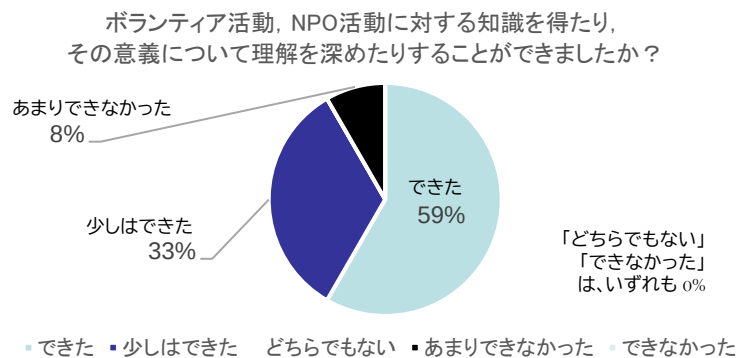
「一緒に買い出しに行ったり、イベントの運営をしたりと、あらゆる場面でフランクにご同行していただきました。学生と同じ目線に立って活動をしていくなかで、(中略)よりよい活動・イベント運営に繋がったと感じています。」

など、学生のインターンシップ参画が団体の既存事業を前進させる結果にもつながりました。

学生の中には「何をするか明確な方が安心して活動に参加できる」と感じている人も一定数います。その面では、既存事業は実行するタスクがある程度明確なので、短期間でも学生がスムーズに活動に関わることができたと捉えられます。

タスクが明確ということは、誰がやってもある程度同じ成果が得られるよう業務が汎用的なものとして整理されている状態であるとも言えます。業務が属人化しやすい小規模の(とりわけモノではなくサービスを扱う)NPOにとっては、結果的に業務の整理に役立った可能性も考えられます。受け入れ団体の中には、学生とのやりとりによって「学生にアウトプットすることにより、自分自身の振り返りとなる。」と、省察の機会を得たと感じる団体もありました。

また、自分たちが対峙している課題そのものを普及啓発していくこともNPOにとっては重要な活動です。インターンシップを通して学生たちに社会課題の認知や当事者意識の醸成を促せられたことは、普及啓発としての効果もあったと言えます。



その当事者意識の醸成は、インターンシップ後にも影響を及ぼしました。いくつかの団体では、インターンシップ後も自主的に活動に関わる学生が生まれ、活動が継続されています。この点においては、学生と団体の方との信頼関係の構築がインターンシップ中にあったことも大切なポイントだと思います。

●社会福祉士を育む現場から ノートルダム清心女子大学の取組

SALCOでは、インターンシップという形だけでなく、別の形でアクティブラーニングについても、実施支援をしています。ノートルダム清心女子大学では、社会福祉士養成課程に所属する3年生を対象としてプログラムを展開しています。

■ 実施概要

このプログラムは、社会福祉士資格を取得するための現場実習を終えたタイミングで実施しています。現場実習で、主に制度事業について理解を深めた後、改めて人の暮らしや社会問題について俯瞰し、制度を超えた創造的な支援について学ぶ機会としています。それらを通じて制度や資源を活用しながら、幅広い支援を提供できる人材の育成をめざしています。

■ 学生の「こうしたい」を引き出す支援

学校で実施することによる緊張や、自分の意見や考えよりも「正解」を探してしまうといった気持ちをできるだけ取り払い、主体的に学ぶプログラムにすることを、SALCOでは意識しています。そのためのひとつの方法として、今回は事前学習後日に、相談対応の時間を設けて、学生の取組に伴走しました。



▶ 相談は、インタビューに向けた準備段階の時期に行いました。対面で実施するグループ、オンラインでのインタビューとなるグループがありますが、どちらも上手いくのかと心配そうな面持ち。インタビューの内容を考えるだけでなく、その場を和やかに進行できるよう意識するのが大切。始まりの挨拶、自分たちの取組の趣旨説明などとして、質問も相手の答えやすさに配慮することが大切だねと伝えと、どの学生さんもイメージがつかめたのか、質問項目の優先順位や時間配分を、具体的に作り始めていました。

素直でまっすぐな学生さんたちだからこそその緊張や不安。実際のインタビュー当日を迎えるまでに大学の先生とはまた違う立場の人へ相談することで、その不安を少しでも軽減できたのではないかと捉えています。



社会福祉士に求められる力と地域での学び

社会福祉士は相談援助を業とする福祉の専門職です。相談援助と聞くと、日常生活になんらかの困難を抱える人の相談に応じ、必要な支援に繋ぐことがイメージされがちですが、それだけではありません。生きづらさや困難な状況の背景にある、さまざまな社会的障壁に働きかけ、社会環境を変えていく役割もあります。特に、社会経済状況が大きく変化する中で地域生活課題は複合化・複雑化しています。社会福祉士には、既存の制度や枠組みを超えた創造的な支援や働きかけが求められているのです。

そこで、数年前から、養成教育の一環として、NPOセンターさんにご協力いただき、地域生活課題に対して創造的な活動をしている団体にインタビューし、学び考えたことを発信する取り組みを行ってきました。インタビューを通じて地域生活課題の実態や福祉実践の幅広さを学ぶとともに、各団体の活動への思いに触れることで人格的な成長に繋がっています。

さらに、今年度はSALCOさんにご協力いただき、アウトプットの方法として福祉を学ぶ高校生に伝える形に挑戦しました。学生たちは、自分の言葉で伝えることの難しさを体験するとともに、高校生とのやり取りから達成感とやりがいを得ることができました。学生たちの感想に、取り組みを通じて、社会福祉士に必要なスキル、聴く・伝える・表現する力が身についたとありました。SALCOさんのアドバイスによって、これまでの視野を広げる学びから、さらにスキルの向上に繋がりました。今後も皆さまにご協力いただきながら取り組みを続けていきたいと思っています。ありがとうございました。

ノートルダム清心女子大学
人間生活学部人間生活学科
准教授 濱崎絵梨



	ノートルダム清心女子大学
位置づけ	課外プログラムとして実施
対象	ノートルダム清心女子大学学生 (社会福祉士養成課程に所属する3年生)
取組	① 課題解決に取り組む人へのインタビュー ② インタビューでの学びを高校生へ伝える 「交流会」の実施
インタビュー協力	・ NPO法人オカヤマビューティサミット ・ 岡山市こども福祉課 ・ 社会福祉法人京都福祉サービス協会 高齡者福祉施設紫野
実施のプロセス	STEP1 ・ 教員とSALCO職員による プログラムの事前打ち合わせ STEP2 ・ インタビュー先の調整 STEP3 SALCOによる事前学習 STEP4 ①に向けたSALCOの伴走支援 STEP5 ①②の実施 STEP6 教員とSALCO職員による 取組の評価
ポイント	・ 社会福祉士養成の質的向上が目的 ・ 同じ福祉を学ぶ高校生たちへ、学んだことや魅力を伝え、同じ土俵で、福祉の仕事やキャリアについて考える機会

● NPOと大学が協働で「授業」をつくる

いわゆる「講師」という形で対応するプログラムもあります。ただ決まったテーマについてお話するだけではなく、それぞれの先生方と、授業の目的や方向性などについて意見交換しながら、授業をつくっています。

	岡山大学「対話による社会参画入門」	新見公立大学「NPO事業論」
SALCO (岡山NPOセンター) が担当部分	・ 授業の一部の講師を担う ・ 三大学合同発表会の企画・運営 ・ 学生の成果報告の場の提供	・ 岡山NPOセンターとして講師を担う ・ 授業終了後の、学生の取組に対するフォロー

■ 岡大の授業発 三大学合同発表会

岡大における「対話による社会参画入門」では、学生たちの成果を、授業内だけではなく、もう少し違うところでも発信できないだろうか、先生よりご相談をいただきました。その一言をきっかけに、岡大、県大、ノートルダムの三大学による、合同での取組発表会が実現。インターンシップや授業での課題、インタビューなど、方法は様々でしたが、「地域の課題解決」という同じテーマで学びを深めた学生たちがオンラインで集まり、それぞれの視点で発表をおこないました。大学も学部も学年も異なる学生同士で意見交換する機会は多くなく、学生にとって、理解を深める場になっていたことが、実施後のアンケートからも感じられました。

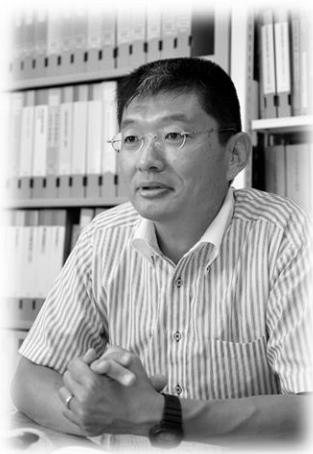
■ NPO法人設立のプロセスを通じて学ぶ授業

新見公立大学における「NPO事業論」では、岡山NPOセンターの職員が複数名で講師を担い、授業を進めました。授業

地域での取組が引き出す学生の可能性

「対話による社会参画入門」は、大学生が研究室での学びを社会と関連付け、社会の改善に活かすことができるようになることを目指した授業です。受講生は、まず、岡山の地域課題を探り、その課題解決のための方法を検討します。そして、実際に課題解決に取り組むわけですが、その際に、すでに実際に同様の課題解決に取り組んでいる個人や団体を探し、その方々のもとで解決に向けた活動に関わります。タイトルにある「対話」は、この授業の鍵です。課題発見、解決の過程で必ず地域の人々と直接対話をするをノルマとしています。この地域の人々との出会いを助けてくれたのが、SALCO(岡山NPOセンター)でした。「この課題の解決に取り組んでいる人(団体)はいるか?」、「それは、どのような人(団体)か?」、「どうすれば、その人(団体)と出会えるか?」。このような学生の疑問に、丁寧に答えてくれました。そして、今年は、学生の取組の成果発信についてもご支援をいただきました。紹介していただいた先での体験が学生の学びにつながっているのはもちろんですが、ご支援いただいているSALCO自体からも多くのことを学生は学ばせてもらっています。そして、授業を担当している私自身も、SALCOの西村こころさんをはじめ、スタッフの方々から大いに刺激をいただいております。今後、大学として連携を一層強固なものとし、地域の担い手の育成に向けて協働していきたいと考えています。

岡山大学大学院教育学研究科
教授 桑原敏典



では、関心のある地域課題を選び、複数のチームに分かれて仮説立案から予算計画も含む事業モデルづくりに取り組みました。最終回では各チームが立案した事業についてプレゼンをおこなっています。具体的な事業計画作成～発表会準備の期間では、職員が複数名で各チームの事業内容に関する相談対応にあたりました。職員と意見交換をすることで、例えば運営体制の相談から実際のNPO法人の職場に関する話題に広がったり、キャリアに関する話題に発展することもありました。先生にもご助言をいただきながら、NPO法人や地域課題を学びの素材としてただ消化するのではなく、より自分事に引き寄せて学べる授業となるよう、育んでいます。

NPO事業論

授業を通じてNPOに触れることの価値と期待

本学は令和元年(平成31年)に短期大学から4年制大学に改組し、その第1期生が現在3年生となりました。その中で岡山NPOセンターの石原代表理事をはじめ、スタッフの皆さまに地域福祉学科3年次開講専門科目「NPO事業論」(選択)の非常勤講師をお願いしています。3年次開講ということで、今年度(令和3年度)初めての開講となります。本科目を設定した目的ですが、地域福祉学科では社会福祉士の養成をしています。相談援助(ソーシャルワーク)を業務とする社会福祉士ですが、社会保障の公的サービス利用に留まらず、社会資源を開発していくことが求められています。その一つの手段としてNPO法人を立ち上げ、社会資源を創設することがあるのだと思っています。その力を身に付けるため、この科目を設置し、岡山NPOセンターの皆さまに講師とコーディネートをお願いしました。

SALCO(岡山NPOセンター)との連携ですが、この科目の他に「地方行政インターンシップ」という科目があり、このインターン先を市町村役場とNPO法人にしています。社会福祉系の学科なので、福祉機関や福祉事業所との接点はありますが、NPO法人の分野は多岐にわたることから、その接点が少ないのが現状です。SALCOに、その橋渡しになっていただいたことで、学生は多様な分野のNPOでインターンを行うことができました。これは、この連携なくしては出来なかったことだと思っています。学生の中にはインターン後もインターン先のNPO法人とつながっているケースもあり、いい関りができていると感じています。

今後、お願いしたいこと、期待したいことですが、継続して関わっていただければと思うのと、公や産ではない立場で、社会課題に対して活躍できるNPOの可能性を学生に伝えていただければ、ありがたいと思っています。

新見公立大学
健康科学部地域福祉学科
教授 山本浩史





SALCO 窓口から

相談窓口について

ボランティアや地域に関わる活動をしたい、と思った学生が気軽に相談できる場所が実は少なく、彼らに情報が届いていない！という気付きが、SALCO発足のひとつのきっかけでもありました。現在、SALCOの相談窓口は月に4回程度、オープンしており、これまでに25件の相談が寄せられました「ボランティアをしたい」「NPOのことが知りたい」といったきっかけが多いですが、最近では「進路に役立つ活動がしたい」との声も寄せられています。

「活動について相談したい」「自分でやりたい活動がある」といった相談では、企画の立て方や広報の仕方を共有するだけでなく、内容によっては相談対応を超えて実際の運営サポートも行っています。SDGsを同世代にも関心を持ってもらいたい、との声から一緒にイベントを企画したり、同世代が求める居場所を検討するために講師をお招きしてワークショップを開催したり。それぞれに適切なサポートの提供を心がけています。

大人からの相談もお待ちしています！

これまでほとんどが学生側からの相談だったのですが「若い人に関わってもらいたいけどどうしたら…？」という悩みはNPO側にもあるのではないのでしょうか？若い世代に届く情報発信のヒントを提供したり、実際に若者を迎える企画などご相談に乗ります。お気軽にお問い合わせください！

担当者から

相談窓口予約が来ていると いつもワクワクします！それらは全く同じ内容がないからこそ私自身も楽しく取り組んでいます。相談の中では、「こんなことに興味があるけど、何ができるかわからない…」と話してくれることが何度もあるのですが、それらの多くはすでに岡山で活動しているNPOがあり、もう一歩踏み出せば活動に繋がったのに…！ということがほとんど。もやもやと悩んでいる学生目線だけではやはり情報を見つけづらく、その「もう一歩」を団体とお繋ぎする役目が相談窓口なのだと実感しています。
(SALCO窓口担当:としね)



相談窓口会場:ハッシュタグ岡山

北長瀬駅直結の商業施設、BRANCH岡山北長瀬内の施設。シェアスペース、シェアキッチン、コワーキングスペースをさまざまな用途で利用できるほか、「レミファ#マーケット」などの企画も実施。「新しいふつう」をコンセプトに、「やってみたい」を「やってみました！」に変えるお手伝いをしている。
アクセス:岡山市北区北長瀬表町2丁目17-80

情報を知るには？

SALCOの主な情報発信ツールはLINEです。公式アカウントをフォローしていただくことで月に数回お知らせが届きます。内容は、相談窓口のお知らせやおススメボランティア情報など。現在約100名のご登録があり、このLINEのお知らせからボランティア活動に参加することができた！などの声も届いています。

相談窓口へのお申し込みは？

公式LINEのMENUから、または岡山NPOセンターのHPからSALCO相談窓口のお知らせについてご覧いただけます。お申し込みフォームからご希望の相談日時や相談内容などを入力、相談当日は会場での対面と、Zoomによるオンラインをお選びいただけます。1枠あたり30分を目安にしています。1度だけでなく複数回にわたってご相談いただくこともあります。「何ができるのかわからない、でも相談したい…」なんて気持ちでもOK。相談担当職員が優しく丁寧にご対応いたします。

たくさんの
お申し込み
お待ちしております！

▶ 公式LINEの
配信イメージ。
カレンダーの
形式でボラン
ティア情報を
お伝え。
掲載するボラン
ティア活動
も随時募集中
です！

▶ ご登録は
こちらから！



【発行人】特定非営利活動法人岡山NPOセンター（代表理事・石原達也） 【編集人】西村こころ（参画推進センター所長）

【お問い合わせ先】〒700-0082 岡山市北区表町1丁目4-64 上之町ビル3階

電話 086-224-0995 FAX086-224-0997（上記事務局）

E-mail npokayama@gmail.com URL <http://www.npokayama.org/>

業務時間 祝日を除く月曜日～金曜日

【発行日】2022年 3月 20日